

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

浦上宗鉄

浦上宗鉄は、史料上、永禄末年から天正年間（16世紀後半）の30年ほどの期間に活動が確認できる大友氏の家臣です。生没年は定かではありませんが、特に大友義鎮（宗麟）や義統の側近に取り立てられ、1580年代半ばからは入道名を「道冊」とも名乗っています。

大友政権下での宗鉄の地位を最も物語る、「天王寺屋会記」という史料があります。堺の豪商天王寺屋宗達・宗及父子による茶会日記で、2人が天文17（1548）年から天正15（87）年までの40年間に開いた1300回もの茶会の詳細が記されています。そこに集ったのは、織田信長や豊臣秀吉、信長入京前

に畿内を制していた三好一族など。彼らが「茶の湯」という独特な作法空間をサロンとして利用しながら、政治的交渉や駆け引き、歓談などを行っていたことが分かります。

その茶会記録のうち、天正14（86）年4月3日に宗及が開いた「朝会」。亭主宗及のもとを訪れたメンバーは「豊後大友入道休庵、浦上道察、中や宗悦、後に道叱」と記録されています。「大友入道休庵」とは当主大友義鎮のこと。「中や宗悦」は、この時期に大友氏や豊臣氏と結んで日本一の富を蓄えたとき、中国や東南アジアとの貿易をも手かけた豊後の豪商仲屋宗越。遅れて来た「道叱」は天王

寺屋一族として九州方面に向かい、大友氏らと結び付いた商売をしていた天王寺屋道叱を指します。

つまり、この日の朝、堺の天王寺屋の茶室に集ったのは、亭主宗及とその叔父の道叱、客人側として豊後の大名大友義鎮とその政商的立場の仲屋宗越の面々。そして、そこに義鎮の側近

である「浦上道察」が、唯一の家臣武士として同行しているのです。ちなみに、本来「道冊」と記すべきところを「道察」と誤記したことから、宗及と道察はそれほど旧知ではないことも分かります。

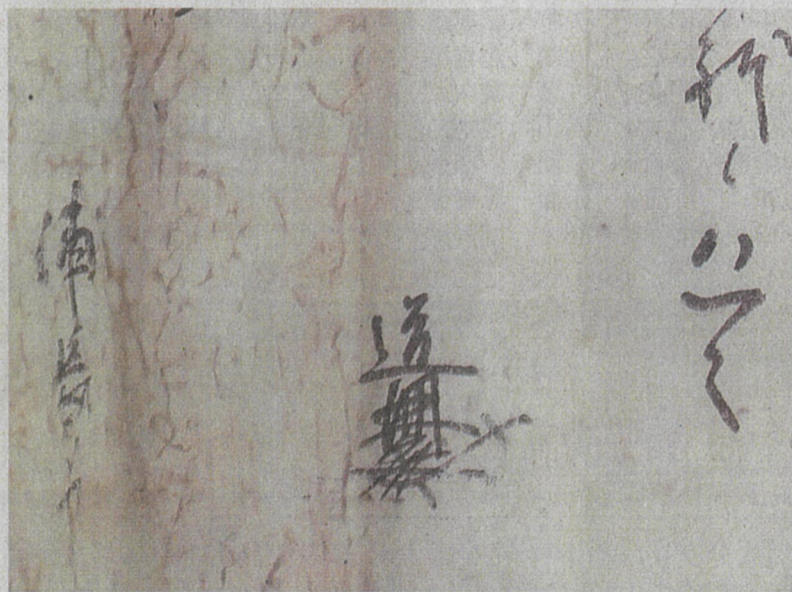
実は、この時の大友義鎮の大坂行きは、翌年58歳でその生涯を終えることになる自身にとって、自らの領国の命運を賭けた旅でした。戦国期の九州を二分する島津氏との抗争の中、全面戦争という手段を選ばなかった義鎮。天下統一を成し遂げつつある秀吉のあつせんを求め、わずかな家臣を伴って大坂城に登り、この茶会の2日後に7歳年下の秀吉との面会を果たします。

その義鎮にとって人生最後の外交交渉の旅に同行した側近が、浦上宗鉄だったのです。多くの側近衆の中で、宗鉄が義鎮に最も信頼された家臣だったことが分かります。

（名古屋学院大学国際文化学部長・教授）

11月1回掲載

義鎮に最も信頼された側近



浦上道冊の署名と花押（国立歴史民俗博物館蔵「豊後若林家文書」から）